

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	21222002	研究期間	平成21年度～平成25年度
研究課題名	大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築	研究代表者 (所属・職) (平成26年3月現在)	奥村 弘（神戸大学・大学院人文 学研究科・教授）

【平成24年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
<p>本研究は、自然災害による被災歴史資料を保全する技術方法論の実践的検討と被災地域での経験・情報収集とその共有に加え、地域歴史資料を次世代に引き継ぎ地域住民の歴史認識を豊かにしうる「地域歴史資料学」の構築を目指すもので、幾つかの重要な進展があり研究は概ね順調である。</p> <p>なかでも被災資料の保全活動についての活動の記録、水損歴史資料の保全に着実な成果を挙げており、資料保全の課題についての学界での共通認識形成への寄与は大きい。</p> <p>東日本大震災の被災問題をふまえて「地域歴史資料」概念を再構築し、「地域歴史資料学の構築」に関する提言及び国際比較研究がなされ、研究が進展することを期待する。</p>	

【平成26年度 検証結果】

検証結果	大規模災害にあった際の史資料をいかに保全するかについては、各地での歴史資料ネットワークの形成や被災地フォーラム開催を進めたことによって、さらには国際的発信をも積極的に行ってきたことから、その成果が著作物としてまとめられるなど、大いに評価されるものであり、当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	ただ、課題に掲げた地域歴史資料学の構築という面では、資料保全に力が注がれたこともあって、やや問題を残したように思う。保全にとどまらずに地域文化をいかに掘り起こすべきかについての実践的、理論的な試みが更に求められる。また、保全すべき史資料を民俗・考古学にまで広げ、総合的に考察してほしい。